

(第3種郵便物認可)

# 葛谷栄一の異見私見



マッチアップする。その差が大きいだけに、成長の余地は大きい。農業の成長産業化を目指す、という筋書きである。そこには気候風

「攻めの農林水産業」の展開と、その一方で若者の田園回帰現象等、農業の現場が大きく揺れ動く中、「日本農業辺境論」めいたものをしきりと考えさせられている。

「日本農業辺境論」といえば内田樹著『日本辺境論』をすぐ連想されるであろう。一つがまさに内田の「日本辺境論」の農業版である。「日本辺境論」の核心となるのが「常にどこかに『世界の中心』を必要とする辺境の民、それが日本人なのだ」との認識である。欧米並みに大規模面積で大農機具を使つての効率的な農業でなければ農業はなない、との固定観念にも似た意識は根強い。近代的な大規模農業への信仰は明治開国以来連綿として継続され、日本農業は常に劣等意識をもち眺められてきたといつていい。近年、グローバル化が加速するのにもなつて劣等意識は増幅され、経済原理主義を徹底し、市場化・自由化・国際化にさらすことによつて日本農業の構造改革をすすめるようとしている。攻めの農林水産業によつて規模拡大している事例も少なくして、農業先進国に

土、地理的条件等大陸とは大きく異なるわが国が置かれた環境・条件を反映させた、日本の農業があつてしかるべき、との認識が入り込む余地はない。

ところが、辺境にそ

その日本農業を改革する胎動が芽生えつつある

## 日本農業辺境論

業や有機農業等も消費者と直結し、地産地消や新鮮、安全安心を強調することによつてその存在感を高めてきた。ロドルフ・デュラントとジャン・リュック・ブルニエによる『海賊と資本主義』なる好著がある。そこでの「中世組織とは異なる発想、独自のルールや、所有について考えがあつたからこそ、彼ら（海賊）はデジタルな空間、また規格化されていないグレイゾーンで生きる事を選んだのではないだろうか」「古代の海賊は、盗賊、都市国家の敵、無法者という比較的単純な存在であつたが、近代以降の海賊組織は様相が異なる。刻々と変わる資本主義の影響を受け、ある種の公益を守る存在となつたのだ。ここでいう公益性とは、資本の流れの独占化を阻み、新しいモデルを示すことを意味する」等の指摘はきわめて示唆的であり注目し得る。

中山間地域農業、都市農業、有機農業はいずれも「本流」の農業ではなく、辺境であり「海賊」として差をえない。今これらが日本農業改革の「ゆりかご」となりつつある。日本農業をけん引していくのは「攻めの農林水産業」以上に、これら「海賊」がもしもできない。辺境の農業を元気にしていくところにむしる活路が開かれるような気がする。（農的社會デザイン研究所代表）